

柳井病院創立前後の思い出



元広島第1陸軍病院長
元国立柳井病院長
元吉 慶四郎

広島陸軍病院は、終戦近くになって2つに分かれ、本来の広島陸軍病院は広島第一陸軍となり、元陸軍幼年学校の建物を本院とし全部の分院を管轄し、広島師団の管轄となる方を広島第二陸軍病院と呼び、建物は従来の広島陸軍病院の建物を使用することとなった。

昭和20年8月6日の原爆により広島第一陸軍は、本院及び第一分院は完全焼失、その他の市内にあった分院は、全部重要部分が破壊されて、病院として使用することが出来なくなったので、郊外戸坂村の小学校にあった臨時分院を本院とし、主として原爆による軍官民一切の患者を診療したが、手狭のため約1カ月後可部町の小学校に移り、引き続き被爆者の診療に従事した。しかし、いつまでも学校を借りて居られないので、丁度其のころ解散して空兵舎となった柳井町の船舶部隊の建物を使用することとし、山口県から移管して貰って現在柳井療養所のある所に落ちつき、間もなく厚生省の管下となり国立柳井病院と改称した。

この時、職員は広島第一陸軍病院本院の生き残りの者、広島・山口・島根3県下に散在して居た分院の勤務者、また、地元で新たに採用した人々合計約150名であった。

広島第一陸軍病院の終わりから、国立柳井病院の初期にかけて、今も思い出されることの2、3を挙げれば次の通りである。

1. 病院の水路輸送

可部小学校から柳井への引越しは、意外に困難であった。可部では、戦争中各所に疎開して置いた衛生材料・食糧その他の諸材料を漸次取り寄せたので、荷物は相当多くなって居たが、これを運ぶのに交通機関が極めて不便であった。

昭和20年9月に台風による大水害が可部地方を襲い、太田川の堤防上を通過して居た可部・広島間の主要道路は数箇所決壊し、車輛不便となって居たので、川岸までは小さな手車で運び、数隻の川舟に載せて、太田川を宇品まで下り、人員は約10kmを徒歩して宇品に至り、その所で機帆船2隻を雇い、人員材料全部を積んで柳井に向かった。

ところが、1隻は馬力不足のため、柳井近くの沖合で引き潮に流されて前進出来ず、一晩立ち往生した後、上げ潮に乗って漸く柳井港に入ることが出来た。

2. 施設の整備に進駐軍の援助を受ける

柳井移転後、間もなく進駐軍の山口県接收係員の1人、ウィリアム中尉から何故も

っと多くの一般患者を収容しないかとの、督促があった。実は、移転に際し、これまで収容して居た患者は、本人の希望に従って各自の家庭或は便宜な病院に行かせ、柳井迄連れて行ったのは20名許りであった。我々も、もっと多く収容したかったけれども、当時、世相が甚だ陰悪で元軍隊の所有だった物は、分捕り自由と心得て居るものがあり、この結果わずかの間に空兵舎が荒らされて、電灯のコードさえ大部分外されてある様な有様で、病院としては勿論、単に宿舎としてさへ使用しかねる状態だったので、この旨訴えた所、忽ち電球1千個を届け来り、なお、寝台も百個位渡すから平生まで受け取りに来れといわれた。

当時、我々にはトラックや機帆船を集める能力がなかったので困っていると、ウイリアム中尉がトラック5台機帆船3隻を集めて、海陸両路から運んでくれたので助かった。

この寝台は、兵舎用の2段式木造だったので、病院の職員が交代で2つに鋸断して使用した。

3. 暖房用木炭の製造

暖房具といっても、木製の火鉢があるばかりであって、これに使用する木炭の調弁が出来ないので、色々工夫して見た。まず、防空壕の支柱や天井の丸太を掘り出して切り、これを燃やして適当な時期に土をかけて、消し炭を造った。これは、多少成功して実用に供した。

次は、本式の炭がまを築いて試みたが、これは失敗した。かまが割れたり、原木が全く灰になったりして、炭が出来なかった。原木が枯れ木だったことが、最大の原因らしかった。

4. 海幸山幸の利用

当時はすべて配給制だったので、小さな村に俄に多数の者が移住したため、物資不足を来し、殊に野菜や味噌、醤油の入手が困難であった。そこで、時々海にでて貝を拾って吸い物をつくり、野草を摘んで汁の身や煮物とし、調味料や野菜の代用とした。食べられる野草については、戦争中から教育してあったので頗る役に立った。炊事や入浴に必要な薪も殆ど買うことが出来ないので、これも防空壕から丸太を掘り出して使用したが、これを切ったり割ったりするのが大変な労働で、院長以下の男の職員が交代で服務した。

5. 海岸病棟の改造

兵舎は皆2階建であるから、患者によっては不便なので、平屋の病室が欲しく海岸に近い2棟の改造許可を得た。ところが、この建物には頑丈な発動機据付け用の装置があり、この取り除き作業は随分困難であった。工事請負者は大島の人で、5、6人の職人を率いて、病院内に泊まり込んで仕事をした。

風のある日は、波の音が騒がしい欠点はあるが、防波堤が近くて釣りに便利な事と眺めがよいので、多少は気晴らしにもなるものと思つての改造であった。

(注) この回想記は20周年記念誌の掲載並びに30周年記念誌に掲載されたものです。